Osaka University Knowledge Archive

Title	高齢者福祉施設におけるケア環境の小規模化に関する研究
Author(s)	松原, 茂樹
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44318
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【84】

氏　　名	松原茂樹（まつばらしげき）
博士の専攻分野の名称	博　士（工　学）
学位記番号	第　17871　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科建築工学専攻
学位論文名	**高齢者福祉施設におけるケア環境の小規模化に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　舟橋　國男 （副査） 教　授　柏原　士郎　　教　授　吉田　勝行　　助教授　鈴木　　毅 助教授　木多　道宏

論文内容の要旨

本論文は、高齢者福祉施設に入居する痴呆性高齢者を含む高齢者の生活の質の改善を目指して、物理的環境・社会的環境・運営的環境から成るケア環境が小規模化しつつあることに注目し、高齢者の生活と介護職員のケアを把握することにより、小規模ケア環境の有効性についての検討と小規模ケア環境の成立条件の抽出を行い、高齢者福祉施設における小規模ケア環境のモデルを導き出した。

第1章では、高齢者福祉施設の社会背景、既往研究にもとづき、ケア環境の小規模化への動向を考察し、そこでは高齢者の生活と介護職員のケアとが不可分の関係であることを指摘して、研究の目的を述べた。

第2章では、大規模ケア環境から小規模ケア環境へ環境移行した25人の痴呆性高齢者について、移行の前後1年間にわたる継続的な行動観察調査を行い、環境移行による痴呆性高齢者の生活の変化を把握し、大規模ケア環境と小規模ケア環境の比較を通して、大規模ケア環境の問題点と小規模ケア環境の有効性について明らかにした。

第3章では、大規模ケア環境から小規模ケア環境へ環境移行した痴呆性高齢者6人について、移行の前後半年間にわたる継続的な行動観察調査を行い、さらに介護職員へのヒアリング調査を加えて、環境移行における痴呆性高齢者の生活の再構築に向けた適応過程ならびに各調査期の行動特性を詳細に検討し、それらに影響を与える小規模ケア環境の具体的な環境要素を考察した。

第4章では、小規模ケア環境の整備を行っている二つの高齢者福祉施設において、各施設の高齢者と介護職員に対する定時行動観察調査を行い、高齢者に対する介護職員の関わり方の実態を比較検討し、小規模ケア環境の成立条件を抽出した。

第5章では、小規模ケア環境の整備を行っている二つの高齢者福祉施設において、各施設の介護職員に対する完全追跡調査により、介護職員の介助行為などの様態を比較検討し、小規模ケア環境における介護職員のケアの時空間的特性を明らかにした。

第6章では、各章の結論をまとめ、高齢者福祉施設における小規模ケア環境のモデルを導き出すと共に、今後の小規模ケア環境の課題を示した。

論文審査の結果の要旨

日本において高齢化が急速に進展し、それとともに心身機能が低下した高齢者が増加しているなか、高齢者福祉施設の整備は重要な課題である。1990 年代前半より、施設に入所する高齢者の生活の質の改善として、それまでの収容の場から生活の場へと施設整備が転じてきている。特に近年、高齢者が在宅に近い環境のなかで過ごす生活の場として小規模ケア環境が注目され、その効果が期待されつつあるとともに、またその問題点についても検討され始めている。

本論文は、高齢者福祉施設において、より適切な小規模ケア環境を整備するために、小規模ケア環境の有効性の検証と小規模ケア環境の成立条件の抽出を行い、今後の高齢者福祉施設のあり方について論じたものである。

得られた主な結果は以下の通りである。

(1)大規模ケア環境から小規模ケア環境への環境移行における、高齢者に対する継続的な行動観察調査より、移行直後から次第に自室・共用空間において行為が多様化し、また生活単位ごとに交流の活発化がみられるなど、小規模ケア環境の有効性を実証している。

(2)大規模ケア環境から小規模ケア環境への環境移行における高齢者の生活状況に関する綿密なヒアリング調査ならびに行動観察調査より、小規模ケア環境では高齢者の心身状態や生活に合わせた弾力的な運営的環境が整えられていること、また多様な行為を促すきっかけとなる生活道具や入居者・職員の声かけなど物理的・社会的環境が整備されていることなど、小規模ケア環境の特徴をなす具体的な環境要素を抽出している。

(3)二つの高齢者福祉施設における高齢者と介護職員に対する行動観察調査により、高齢者に対する介護職員の関わり行為では「潜在関わり」が半数近くを占め、その時の介護職員の滞在場所として物理的距離を保ちつつ視覚的な関わりをもつことの意義について、また、介護職員が高齢者と視覚的な関わりを保つためにユニット空間内において介護職員のための居場所の必要性を明らかにしている。

(4)二つの高齢者福祉施設における介護職員に対する完全追跡調査により、小規模ケア環境において介護職員はその場に居続け定着すること、単独ユニット空間内で行動が完結すること、持続かつ安定した高齢者との関係を持つことの必要性を指摘している。

(5)施設における高齢者の生活を支える介護職員に対する小規模ケア環境のあり方について、介護単位と生活単位の完全な一致が不可欠であり、また高齢者の属性に応じた適切な介護職員の配置が必要であることを考察している。

以上のように、本論文は、高齢者福祉施設において近年注目を浴びている小規模ケア環境についてその有効性を明らかにし、また小規模ケア環境の成立条件の抽出により今後の高齢者福祉施設の整備に大きな示唆を得ており、建築工学、特に建築計画学の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。